

学 位 論 文 要 旨

氏 名 紙田 路子

題 目 自主的自立的価値観形成をめざす小学校社会科内容編成の研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は、小学校社会科において事実認識をふまえて児童の価値観形成にまで関わる授業を開発し、それらを体系的に配置することによって、地域から国家へと学習の対象を広げていく従来の小学校社会科カリキュラム構成原理に替わる、教育内容編成原理と新たな授業構成を提案しようとするものである。具体的には、子どもの自主的自立的な価値観形成をめざした授業の開発に取り組み、それらを類型化し体系的に配置することによって、教師の柔軟な単元開発を支援し得る教育内容編成のあり方を提案した。本研究の成果については、次のようにまとめられる。

子どもの価値観形成をめざした小学校社会科授業は、内容面から「人・もの・こと」を対象とするものと、「制度・政策・法・社会的判断」を対象とするものが考えられる。また、方法面からは空間的比較・分析と時間的比較・分析を中心に学習を展開していくものが想定される。本研究では、価値観形成をめざした小学校社会科は、これらの内容と方法を、目標に合わせて適切に組み合わせる構成されることを明らかにした。その組み合わせによって、授業は次の4タイプに類型化される。

- I. 「人・もの・こと」を空間的に比較・分析する授業
- II. 「制度・政策・法・社会的判断」を空間的に比較・分析する授業
- III. 「人・もの・こと」を時間的に比較・分析する授業
- IV. 「制度・政策・法・社会的判断」を時間的に比較・分析する授業

本研究では、これらのそれぞれのタイプについて具体的な授業計画を示し、それらを実践し授業の妥当性を論証したうえで、特質と課題を明らかにしていった。それは、以下の3点に整理できる。

第1は、自主的自立的な価値観形成をめざした小学校社会科の内容編成は、先にあげた4つのタイプの授業を、IからIVへと系統的に配置したものとなることである。本研究で取り組んだ実験授業の結果、いずれの授業計画も小学校社会科として妥当なものであることを証明することができた。また、それらを実施する学年段階についても、I類型は主に中学年、II類型は主に中学年後半から第5学年、III類型、およびIV類型は高学年での実施が適切であることも明らかになった。これらの類型は内容構成および授業構成の基準を示すものであり、柔軟な教師の授業開発を

支援することに資するだろう。

第2は、自主的自立的な価値観形成を保障する小学校社会科授業の、具体的な到達目標を学年段階ごとに明らかにしたことである。それは、中学年から高学年に向けて、多様な見方・考え方の認識、多様な判断基準の認識、自己の判断基準の再構成、具体的状況に応じた判断基準の調整と発展していくものである。判断基準をまだ明確にとらえることが困難な小学校中学年の初期段階にあっては、「人・もの・こと」を比較することで見方・考え方の多様性に気づくことを、中学年後期段階にあっては「なぜ違うのか」について分析することで、背後にある判断基準の多様性を認識することを自主的自立的価値観形成の具体的な到達目標とした。小学校高学年段階では、自己の判断基準の吟味、反省、および状況に合わせて自己の判断基準を具体化することを自主的自立的価値観形成の具体的な到達目標とした。

第3は、小学校社会科における価値観形成の最終的な到達目標が、状況に応じた現実的、具体的な価値判断基準の設定であることを明らかにしたことである。中学年においては、見方・考え方や判断基準の多様性に気づくこと、中学年から高学年にかけては自己の判断基準を見直すこと、最終学年である高学年では状況に合わせて自己の判断基準を具体化することを目的とし内容編成を行うことで、複雑な状況下においても多様な見方・考え方や判断基準をふまえ、調整し、具体的な判断を行おうとする子どもを育成することができる。民主主義社会を構成する市民として社会問題について判断する際には、多様な側面から事象を捉えさせたいうで、自らの価値観に基づいてどの側面からアプローチをするかを決断し、よりよい解決を目指すことが求められる。小学校段階において、状況に合わせて自己の判断基準を具体化しようとする資質を保障することは、このような市民的資質の育成に適うものであることを主張したい。

今後の課題として3点があげられる。第1はさらに授業実践を重ね、評価をもとにさらに修正、改善していくこと、第2は授業実践を分析する際の評価論を実践面から検討していくこと、第3は第5、6学年の授業モデルをさらに開発し、小学校段階における自主的自立的な価値観形成を保障する授業構成について吟味していくことである。